〔研究随想〕

語の多義的意味拡張についての認知的考察
—「色」の多義性を基に—

松中　完二[*1]

Cognitive Analysis of the Polysemic Expansion of Meaning In the Japanese word “*iro*” ‘color’

Kanji MATSUNAKA[*1]

Abstract

Cognitive semantics, researchers agree that the meanings of words and phrases necessarily vary to a certain degree depending on their contexts and situations in which they are used. However, a type of shared core sense underlies these semantic variations and expansions.

This paper examines polysemic structures and its cognitive mechanisms related to the Japanese word “iro” ‘color’ in Manga through the lens of cognitive semantics. Through the employment of adequate cognitive notions, such as “the core sense,” the expansion of the polysemic meaning of “iro” ‘color’ can be explained. I further identify a useful approach to apply these findings to the description of meaning presented in dictionaries.

Key Words：色，多義，辞書記述，中心的概念

1．はじめに

多義は，言語学における主要な研究テーマの一つである．しかし多義の研究は国広哲弥（1998：265-266）の指摘にも見られるように，殆ど目立った進展を見せてこなかった．多義とは１語が複数の意味を有し，それらの意味が体系的に関連している現象である．言語学的に多義の定義は枚挙にいとまがないが，多義の複数の各語義が意味的関連性を持ってつながっているという見解で一致する（『言語学大辞典 第６巻 術語編』（1996：885），Bolinger（1977：19），Goddard（1998：19），Ravin and Leacock（2000：１），国広哲弥（1982：97），Cruse（2000：115），Taylor（2012：219），辻幸夫編（2013：217），Lakoff（1987：416）など）．しかしながら，多義の意味派生の原理については，まだ有効な手立てが見つからないのも事実である．20世紀に台頭した認知言語学では，多義の派生原理を中心的な意義から派生的な意味の連鎖による人間の認識に求める姿勢を取る．その一環として，本論では漫画の台詞に見られる日本語の「色」を取り上げる．

漫画の台詞は，われわれの現実生活での言語使用の如実な反映である．それは流行語，若者言葉，俗語など多岐にわたる．その一つに，語の多義的使用の実際も見られる．そして漫画の台詞を利用する利点は，多義を生成する場面がコマという単位で分かりやすく，冗長な場面の説明を省くことが可能な点があげられる．しかるに意味論の視点で漫画の台詞を利用することはこれまでなく，その言語資料としての言語学的価値も鑑みられてこなかった．本論では日本語の「色」を対象語とし，様々な漫画の台詞に見られる「色」の使用例を基に，そこから国語辞典の意味記述の不備や多義的意味の拡張の原理について解明する．あわせて多義の解明に筆者の主張する「中心的概念」の有効性について提言し，今後の研究の可能性について示唆する．

[*1] 共通教育科
令和３年10月29日受理

2．先行研究

2．1　認知意味論における多義の捉え方

20世紀後半になると，言語学と認知心理学が融合し，人間の心理的側面から意味解釈という行為を解明しようとする動きが台頭してくる．そうした学問分野を「認知言語学」と呼ぶ．そして特にそこでの意味研究を「認知意味論」と呼び表す．Lakoff and Johnson（1980）をきっかけに，我々の日常言語とその意味認識に際して，比喩が大きく影響を及ぼしていることが広く認識されるようになり，認知言語学の研究者を中心に，多義構造がメタファー的な原理に基づいて形成されている点が，今日までに次々と明らかにされてきた．日常の言語使用における多義認識の問題も，その語を用いる我々の視点との関連から説明が試みられることになる．認知科学では，多義現象を主にカテゴリーとメタファーという視点から捉え，“人間の五感，空間認知，運動感覚をはじめとする身体的な経験の反映”を支えている原理が，メタファー的な認知活動に立脚するものであるとの考えから，多義構造を解明しようとする．認知意味論では，多義語の意味は Wittgenstein（1953）の主張する「家族的類似（family resembalance）」という現象により互いに関連しており，ある領域から他の領域へと意味を比喩的に投射することによってもたらされているとの考えに立つ．そうした意味の拡張を支えているのが中心義の存在であり，各語義は中心義からメタファー的に推移，拡張して多義が形成される．多義の意味認識の拡張について，認知意味論では，語がどんなに多義に発展し，語義が複数個存在しても，そうした語義は互いに関連し合い，それを説明付けることが可能な意味のネットワークが構成され，意味のネットワークを生み出す中心となる共通の概念認識が存在すると考える．従来の多義研究では，語義間の意味の有契性とそうした有契性を支える中心的な意味の解明が大きな目的であった．

こうした多義研究の流れは Brugman（1981）に端を発し，Lakoff（1987）の「放射状カテゴリー」で一つの雛形が生まれ，Tyler and Evans（2003）の「多義性モデル」という経緯をたどるが，そこでの中心的な議論の一つは，多義の拡張と有契性を支える中心義となる意味の解明である．辻幸夫編（2013：217）も述べるように，認知意味論において多義性が問題となるのは，以下の 3 点である（太字は原文のまま）．

① 意味どうしの間で見られる同期づけと**比喩的拡張**（あるいは隠喩論）の問題．
② **プロトタイプ**と**家族的類似性**．
③ **構文**の多義性の問題．

認知意味論が誕生してからのここ30年ほどの多義研究の流れを見れば，Lakoff（1987）の over の意味研究に端を発し，それに従う形で語義を細分化する流れと，そうした研究に拮抗する形で，多義の中心にあるものを突き止めようとする二つの相反する潮流が見られる．この点については松中（2022）で詳細に検証しているので，そちらを参照されたい．

2．2　多義における中心義の設定

多義を説明する際，言語学的には基本義あるいは中心義の設定が不可欠になる．しかし Fillmore（1982）は，基本的または中心的な語義の設定に，様々な解釈が可能でその解釈の中には互いに相入れないものも存在するとして，疑念を呈する．Taylor（2012：228）は，基本義とは通時的な観点から見て最も古くからある意味で，そこから時間的推移の中で語義が拡張したものであるとの解釈を指し，中心義とは幼児が母語の習得過程で最初に習得する意味，ないしは当該言語の母国語話者にとって，先述した認知言語学におけるプロトタイプ性の最も高く，最も際立った語義であるとの解釈も成立することを指摘している．そこでは通時的な時間の視点はあまり必要がない．多義は時間的推移による意味の転移，変容および拡張という現象であるが，中心義の設定はそうした時間的推移を乖離して進めることが可能である．

認知意味論の研究者たちに共通の態度として見られるのは，英語の空間辞のような多義を，放射状に広がるネットワークによって異なりながらも互いに関連する概念カテゴリーとして扱うということである．Bolinger（1977）は“a single overarching meaning”，“a common semantic base”，“a common thread of all uses”など，様々な呼び方で多義の意味拡張を支える中心義について言及している．Colombo and Flores（1984）は，多義語の意味間の相互関係性を扱う際の最良の方法として一つないしは複数の中心的意味があり，その他に周辺的な意味があると仮定することであると主張する．また Tyler and Evans（2003：45）は，多義ネットワークには第一義が一つだけ存在し，他の意義はこの第一義から決まった手順で導き出されると仮定してきた，と説明する．

語の多義性を中心から周辺への放射状的広がりを有するネットワークとして捉える認知意味論の視点による多義研究では，多義研究の二つの姿勢で見たように中心にある意味の呼び方は研究者によってまちまちであるが，互いの意義が関連しあいながら意味のつながりを有し，中心からの共通の意味による派生ととらえる点で一致している．

このように，原義と転義の派生関係が有契的であるということは，ある特定の語と結び付き得る意味に何らかの方向性を与えるものである点で，ある特定の語と結び付き得る意味に何ら制限を加えることのない恣意性という考え方に対して正反対の原理である．そして現在の認知意味論が取る立場は，言語の有契性の立場である．それは Brugman（1981），Lakoff（1987），Tyler & Evans（2003）らの先行研究や，Lakoff（1987）が展開するプロトタイプ意味論の「語は何らかの核となる意味を有し，語義が少しずつずれていても互いに関連し合い，一語で表わされ得るような意味のネットワークを構成している」という基本原理にも見ることが出来る．またそれは，プロトタイプ意味論から派生したネットワーク理論においても同様である．またこうした態度は，多義のみならず心象の投影結果としての言語表現の記述を可能にする側面を有している．それは，Fauconnier（1997：８）の言う「人間の精密な認知構築や解釈を通して映し出された言語表現（elaborate human cognitive constructions and construals）」の記述に通じるものである．こうした共通の意味認識に支えられ，多義を生み出すような概念構造をここでは「中心的概念」と定義する．そして，今回漫画の台詞から集めた日本語の「色」を対象語として，その実証を試みる．

２．３　国語辞書における意味記述

「色」は多義語であり，『広辞苑 第七版』では，「色」の意味は以下のように定義されている．

> いろ【色】❶①視覚のうち，光波のスペクトル組成の差異によって区別される感覚．光の波長だけでは定まらず，一般に色相・彩度・明度の三要素によって規定される．色彩．②社会的・慣習的に定まった色．㋐階級で定まった色．当色とうじき．㋑禁色きんじき．（中略）㋒喪服のにびいろ．（中略）㋓婚礼や葬礼の時，上に着る白衣．色着いろぎ．色被り．（中略）③❶１を取りあげてそのものを表す表現．㋐おしろい．化粧．「－を作る」㋑醤油しょうゆや紅べにの異称．❷華やかな様子・姿．①容姿・髪の毛が美しいこと．そのさま．（中略）②物事のはなやかさ．（中略）❸（中略）①けはい．きざし．（中略）②調子．響き．（中略）❹愛情・情事．その相手．①なさけ．（中略）②色情．欲情．情事．（中略）③情人．恋人．色男．色女．（中略）④遊女．❺（漢語・仏教語から）①種類．品目．（中略）②すがたかたち．形相．（中略）③（種々の物の意）租税としての物品．しき．（中略）❻邦楽で，主旋律でない修飾的な節．また，言葉の部分と節の部分との中間的な扱いをする唱え方．謡曲・義太夫等種目ごとに類型がある．（p. 218.）

Putnum（1975：228）も指摘するように，語には固定的な意味が存在し，具体的に特定されえるが，少数の専門家しかその意味を知らない．その意味を探求し，解明するのが意味論者の努めなら，それを万人のものとする足場的な助けとなるのが辞書とそこでの意味記述である．Haas（1964：1066）は最も正常な文脈が中核にあり，最もおかしい文脈が周辺に置かれると指摘する．その周辺的な意味は，辞書の意味記述に記載されないことも少なくない．

多義を実証する文例は，小説などの文芸作品や漫画の台詞，歌の歌詞など，われわれの日常言語の反映である言語資料から採集することが理想的である．しかるに漫画の台詞は，あまりに当たり前で身近すぎて，その言語学的価値を考察されることがなかった．ここでは，「色」の多義性の実例を見る文例として，漫画の台詞を用いる．言語研究，とりわけ意味研究において，用例こそが真実である．自分に都合の良い用例を創造して勝手にいくらでも作り，そこから演繹的に理論を構築することは簡単であるが，それでは言語使用の信憑性という点で説得力に欠ける．言語研究，とりわけ意味研究は，実際の言語使用の用例を基にそこから帰納的に実証することが必要である．こうした周辺的な意味の理解を助け，その辞書記述への応用を図るのが意味研究の役目である．

そしてわれわれは辞書の助けがなくても，そうした意味の拡張と周辺的な意味を理解することが可能である．その表現と使用を支えるのは，用法基盤モデルによって論じられるように，周囲の使用をわれわれが学習し，模倣した結果である．Taylor（2012：229）は，異なる意味に有契性があることは，それを分析する言語学者にとっては明白なことかもしれないが，だからといってその言語を用いる話者たちがそれらの異なる用法に有契性があることを自覚しているわけでは決してない，と釘を刺す．柏野和佳子・本多 啓（1998：55）は，多義構造の辞書記述という観点から，「辞書の読み手が，常に辞典の記述から意味どうしの関係を推論することは難しいと思われる．そこで，意味どうしの間にある意味的関係をあらかじめ，でき得る限り客観的にとらえ，明示的に辞典に記述しようというのが，「多義構造の記述」の基本的な考え方である」と述べるが，この考え方は辞書の意味記述に限らず，多義語の理解を深め，意味の原理を知ることにつながる．

3．「色」の使用例

ここでは漫画の台詞を基に，「色」の実際の使用例について見ていく．意味研究の世界では漫画の台詞を言語資料の用例に用いることは珍しくない．漫画を用例に使うメリットは，コマによって必要最低限の場面の助けが付与されることである．ドラマや映画の台詞などの台詞だけ切り取っても場面の説明がなく，場面から切り離した言語使用で意味の理解が助けられにくいという側面が強い．またその場面について言葉で説明しなければならず，本来の主眼点である意味の理解の前に冗長な説明から逃れられない．くわえて，漫画の台詞は現代における語の使用を如実に反映しており，言語資料としての価値が高い．こうした理由から，本論でも漫画の台詞を用例として用いる．なお，台詞中の傍線は筆者による．

図１　藤森治見．2019.『美醜の大地』２巻，p. 136．ぶんか社．

図１のような「色」の表現と意味こそ，『広辞苑 第七版』における❶①の定義であり，われわれが「色」の使用と理解において中心的な意味と使用に位置する字義的な意味である．

しかしながら，図２に見られるような「色」は，「色」の本来の中心的意味から派生した拡張的意味である．ここでの「色」は表情といった意味合いで，上っ面だけの態度といった意味合いになる．本来であれば，「色」などという語を使わずに“人の態度はこんなにも変わる”だけで表現として十分成立する．ここであえて「色」を用いるのは，結果的にメッキのような表面的な上っ面だけの浅ましさを強調する機能を有している．これと同様の「色」の使用が図３，図４である．ここでの「色」は，表情を意味する．ここから「顔色」という語が派生する．ただし「顔色（が悪い）」は文字通り血色などの顔の色合いを意味し，「顔色（をうかがう）」は相手の喜怒哀楽などの感情を意味し，同じ顔につく「色」という語であっても，その後に来る動詞や形容動詞により，連語による意味の違いが生まれる．ここでの「色」は，「態度」や「扱い」などといった表面的な見た目のニュアンスであると解釈しうる．「悲しみの色を塗りつけた」という表現は，一種文学的な誇張表現とも取れる．本来であれば，悲しみに色はない．しかし「色」の特性として，表面的に相手に訴えか

図２　藤森治見．2019.『美醜の大地』２巻，pp. 106-107．ぶんか社．

図３　井上雄彦．2010.『バガボンド』32巻，p. 163. 講談社.

図４　藤森治見．2020.『美醜の大地』４巻，p. 103. ぶんか社

図５　加藤キャシー．2020.『鬼獄の夜』４巻，p. 86. 集英社.

ける華やかさで人目を惹きつける魅力を持った性質がある．また経年劣化などの自然的なものであれ意図的な人為的なものであれ，当初の濃さが褪せたり薄れたりもすれば，剥がれることもある．悲しみという言葉との共起で「表情」や「顔つき」に対して「色」を使うのは，その悲しみが最初からあったものではなくある時から表情にとして生まれたもので，今後薄れたり無くなるのではなく，相手の様子や気分を指して用いる表現である．しかしながら，『広辞苑 第七版』の語義設定ではこの「色」の記述は見られず，また既存の語義設定とその意味記述からこうした「色」の表現の拡張と例文は見られず，辞書の意味記述としては不備が残るものとなっている．

また「色」の連語である「色付く」も，『広辞苑 第七版』の定義では以下のとおりである．

> いろ－づ・く【色付く】①花・紅葉・果実などの色が目だつようになる．「柿の実の－・くころ」②色気が出てくる．色気づく．（p. 220.）

図４では喜怒哀楽を表さない無表情な顔に，笑顔という華やかさを取り戻すことを指して「色づく」と表現しており，その意味解釈の原理は図３の例と同様である．こうした認識が働くからこそ，失恋した男が「世界は色をなくした」と言うこともあれば，盲目患者が手術によって視力を回復し，「世界は色を取り戻した」と表現することもできる．一方，図５の「色」はこうした表情からの派生で，「個性」や「独自性」，「存在感」といった意味と捉えられる．ここから，白いウエディングドレスに対して「相手の色に染まる」などという表現が生まれると考えられる．さらに図６に見られるような，自分の色に染まるということの派生から，自分の手中にある主に恋仲の相手を指して，「色」と表現することができる．

図６　阿佐田哲也 原作／嶺岸信明 劇画．2021.『麻雀放浪記』第22話，pp. 174-175.『週刊大衆』2021年３月29日号，pp. 161-176. 双葉社.

ここでの「色」の意味は『広辞苑 第七版』における❹③の定義に基づくが，「色」に「ダンナ」という読みのルビを振るのはこの例が初めてであり，辞書における意味記述の面から見ても新発見である．この原理に基づくと，「色」と書いて「かれ（かれし）」，「かのじょ」，「おっと」，「しゅじん」，「つま」，「かない」，「こいびと」，「あいじん」

など，縦横無尽の読みをあてることも想像できる．こうした，意味的には関連しながらも文字と読みの乖離した言葉の遊びは，日本語に特有の現象でもある．この点については漫画の台詞における文字の読みとルビの観点から，別の機会に論じたい．

また「色」には白黒のモノトーンとの対比で，華やかな色彩から余剰的な色艶といった特性から，表面的に相手に訴えかける華やかさで人目を惹きつける力を持った性質があることは先述したとおりであるが，魅力は価値を生むことから「付加価値」や「おまけ」といった意味を生む．これは，図７の例に見るとおりである．

図７　梶原一騎 原作／原田久仁信 劇画．1987.『男の星座』８巻，pp. 124-126．日本文芸社．

この場合の「色」は大して価値のない10円硬貨を価値のあるものにするといったニュアンスで，この意味は『広辞苑 第七版』における❺③の意味からの派生であると思われるが，その使用例とともに辞書には記述が見られない．また『広辞苑 第七版』の意味記述だけでは，こうした「付加価値」や「おまけ」といった意味と使用を見るには不十分である．そしてこの概念から派生した言葉に，「色物」がある．「色物」とは，本来的には大衆芸能で「主となる演芸とは別に，その演芸を彩り盛り上げるためのその他の芸能ごと」といった意味で用いられていた言葉である．それが時代の流れとともに，主たる立場ではなく，飾り物や亜流といった概念のみが強調されて残り，現在のような「にぎやかし」や「盛り立て役」，「三枚目」といった意味で用いられるように変容していったのである．

また，この意味と同様に『広辞苑 第七版』における❹の②，③の意味記述にもあるように，図８，図９のような異性の持つ華やかさから特に人を惹きつける（性的）魅力に対して，「色」で表すこともできる．「色」のこうした意味も，華やかな色彩から余剰的な色艶といった，表面的に相手に訴えかける華やかさで人目を惹きつける力からの派生であるととらえれば，こうした広範な多義の広がりと意味的なつながりが見えやすくなる．さらに，こうした意味合いから派生して，図10のような性的なニュアンスでの「張合い」や「満足感」，「ときめき」や「高揚感」といった意味合いにまで拡張され，「色」の多義性が生まれる．こうした意味の拡張は無軌道に拡がるものではなく，互いに関連し合いながらネットワーク状に拡がっていくことが分かっており，今回の「色」の例でもそのことが有効に説明づけられる．

図８　倉科遼 作／紅林直 画．2005.『嬢王』vol. 4，p. 145. 集英社.

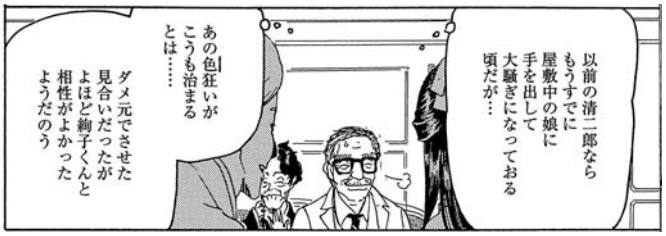

図９　藤森治見．2019.『美醜の大地』２巻，p. 24. ぶんか社.

図10　ムラタコウジ．2020.『アカイリンゴ①』p. 108. 講談社.

このように，「色」の多義性はその基本義として「視覚のうち，光波のスペクトル組成の差異によって区別される感覚で，表面的に相手に訴えかける特性」という意味を持ちながら，そこからメタファー的特性とメトニミー的特性によって拡張することが分かる．

基本義から転じた「色」の特性や性質，機能が人や物に拡張しながら転用されることで，「色」の多義性が生まれる．その中心にある共通の認識は，「鮮やかさや華やかさ，きらびやかさといったイメージを有し，人を惹きつける（性的）魅力を持ち，価値を生むもの．転じて惹かれる対象人物．一方で，経年劣化や人為的に薄れたり禿げたりする浅い表面だけのもの．転じて人の表情や態度」と記述することが出来よう．そしてこれこそが，私の主張する中心的概念に他ならない．一見無秩序にも見える「色」の多義的意味拡張は，この共通認識である「中心的概念」を基にして派生していると考えられる．この中心的概念の存在の明確化により，一見雑多な語義とそこでの概念の拡張，更にはそれを支える意味の有契的な関連も有効に説明付けが可能となる．こうした中心的概念から下部概念への拡張は，Fauconnier（1997：８）の言う「人間の精密な認知構築や解釈を通して映し出された言語表現（elaborate human cognitive constructions and construals）」という主張を裏付けるものである．

４．「色」の多義性の分析

今回，言語資料の用例として漫画の台詞を基に「色」の多義性を分析した．「色」の多義性は，「視覚のうち，光波のスペクトル組成の差異によって区別される感覚で，表面的に相手に訴えかける特性を持つもの．その特性から鮮やかさや華やかさ，きらびやかさといったイメージを有し，人を惹きつける魅力を持ち，価値を生むもの．転じて惹かれる対象人物．一方で，経年劣化や人為的に薄れたり禿げたりする浅い表面だけのもの．転じて人の表情や態度」といった中心的概念を基にその多義性が形成されることを解明した．その結果，「色」の多義的意味派生は，図９のような構造を取る．

こうした「色」の中心的概念であるが，その基本義は『広辞苑 第七版』における，❶①のとおりであろう．しかし問題はそれ以降の例に見るような「色」の視覚に訴える性質のメトニミーによる多義的意味拡張の説明付けである．これらの広範な「色」の意味派生の全体に行き渡るものとして，その中心的概念を無意識に共有することにより，「色」は多義的意味拡張を生む．

「色」の多義性を支える根幹にある中心的概念の存在を実証するためには，現実の言語使用という豊富な用例による裏付けが必要不可欠である．また多義を生む要素として，場面の情報は欠かせない．そうした実際の言語使用の用例と場面の情報を助けるのが，漫画における台詞である．意味の研究，とりわけ多義を扱う際には，用例による実証なくしてはその議論すら成り立たない．国広哲弥の言葉であったと記憶しているが，“百の議論も一の用例の前ではなりをひそめる”のである．とくに図10のような用例は，学術論文においては適，不適の問題をはらんでいるが，多義を扱う際には現在の広範な場面における様々な使用例を呈示することでしか，議論も検証も始まらない．研究者が自分に都合のよい例文を勝手に作り上げるのは，主観的かつ演繹的過ぎて科学的実証には向かないし，言語研究のあり方として大いに疑問の残る方法である．その結果，言語研究の方法としては実際の言語資料からの用例文とそこからの帰納的検証というのが，最初の足がかりとなる．そして用例文の性質については，国広（1982：187-188）でも指摘されているよう

に，録音による口語資料が理想的であるが，処理に多大なエネルギーを要するため必ずしも実際的ではない．このあたりの問題については，松中（2003，2006）で具体的に論じているので，そちらを参照されたい．

そして，こうした多義を生成するのに必要となるものが場面と文脈であり，その点を全て含んでいるのが漫画における台詞であると考えられる．この点は，松中（2003，2004a，2004b，2005，2006）でも少なからず実証してきたとおりである．また多義の意味現象は，Saussure の言う言語記号の対立によって意味が生じるという考えを否定することにつながる．国広（2006：11）が指摘するように，このことは記号対立的言語間の崩壊を意味し，この点についても松中（2018）で詳しく検証した通りである．

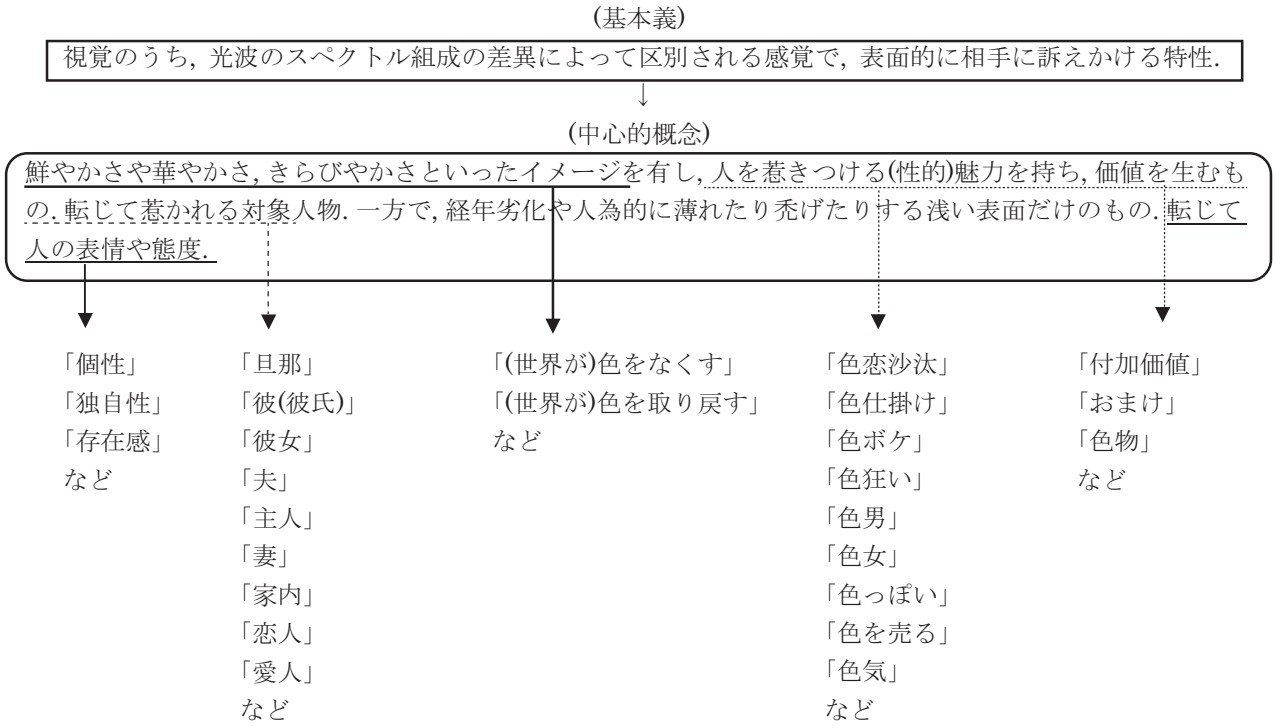

図 9　「色」の中心的概念と多義的意味拡張

国広（2006：11）も指摘するように，同音異義は場面の支えだけを頼りに成立するが，多義の場合は既存の語義に様々な心理的操作を加えた結果として生じるものである．そしてその多義拡張の既存の語義からの距離は，聞き手が同じような心理的操作によって理解しうる範囲内に留めるべきである．この心理的操作を実証するものが，私の主張する「中心的概念」にほかならない．国広（2006）では日本語の動詞の多義についてこうした中心的な概念の有効性を主張しているが，今回の「色」の検証でも明らかなように，「中心的概念」という考え方とその設定は，日本語の名詞にも有効であると考えられる．

5．おわりに

一見無秩序にも見える「色」の語義とそこでの多義的意味拡張は，われわれが無意識に共有している中心的概念を基にして派生していると考えられる．この中心的概念の存在の明確化により，一見雑多な語義とそこでの概念の拡張，更にはそれを支える意味の有契的な関連も有効に説明付けが可能となる．われわれが言葉を用い，その意味を理解しコミュニケーションが図れるのは，辞書の意味記述の助けによってではない．われわれの認知機構には言葉の使用から意味の拡張が生じ，その理解を助けるメカニズムが備わっているのである．そのメカニズムこそが「中心的概念」であり，その実証に有益なのが，日常の実際的な多義的言語使用を裏付ける漫画における台詞と場面である．辞書の用例文にも漫画の台詞からの“生の”言語使用が反映されれば，より豊かな意味の広がりと理解が助けられ，意味研究と漫画研究の有益かつ多角的な発展形の一つになるであろうと思われる．

本研究は，2021年度～2022年度久留米工業大学学長裁量費（研究課題「音と意味と文字の関連性から見る日英語の多

義の原理についての意味論的考察」）による教育研究費の助成を受けた研究成果の一部である.

参考文献

Bolinger, Dwight. (1977). *Meaning and form*. London: Longman.

Brugman, Claudia. M. (1981). The story of over. MA thesis, Dept. of Linguistics, UC Berkeley. *The story of over: Polysemy, semantics and the structure of the lexicon*. New York: Garland Press.

Colombo, Lucia. and Flores, Giovanni. B. (1984). The meaning of Dutch prepositions: A psycholinguistic study of polysemy. In Helmut S. ed. (1984). *Linguistics 22*. pp.51-98. The Hague: Walter de Gruyter.

Cruse, David. A. (2000). *Meaning in Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fauconnier, Gilles. (1997). *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, Charles. (1982). Frame Semantics. In Linguistic Society of Korea ed. (1982) *Linguistics in the Morning Calm: selected papers from SICOL-1981*. pp.111-138. Seoul, Korea: Hanshin Pub. Co.

Goddard, Cliff. (1998). *Semantic Analysis: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Haas, William. Semantic value. (1964). In *Proceeding of the IXth International Congress of Linguists*. pp.1066-1072. The Hague: Mouton.

Lakoff, George. and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. （渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳. （1986）. 『レトリックと人生』大修館書店.）

Lakoff, George. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: Chicago University Press.

Putnam, Hilary. (1975). The meaning of “meaning”. In *Philosophical papers: Vol.2. Mind, language, and reality*, pp.215-271. Cambridge: Cambridge University Press.

Ravin, Yael. and Leacock, Claudia. eds. (2000) *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*. Oxford: Oxford University Press.

Taylor, John. R. (2012) *The Mental Corpus: How Language is Reprsented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.

Tyler, Andrea. and Evans, Vyvyan. (2003) *The semantics of English prepositions: Spatial scenes, embodied meaning and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.（国広哲弥監訳・木村哲也訳. （2005）『英語前置詞の意味論』研究社.）

Wittgenstein, Ludwig. (1953) *Philosophical investigations 2 nd ed*. Oxford: Basil Blackwell.

柏野和佳子・本多 啓. （1998）「多義構造を辞書に書く」『日本語学』12月号, pp. 54-63. 明治書院.

国広哲弥. （1982）『意味論の方法』大修館書店.

国広哲弥. （1998）「英語多義語の認知意味論的分析」『神奈川大学創立七十周年記念論文集』pp. 265-284. 神奈川大学創立七〇周年記念論文集編集発行実行委員会.

国広哲弥. （2006）『日本語の多義動詞』大修館書店.

松中完二. （2003）「言語資料としての用例文の性質とあり方について」『敬愛大学　研究論集』第65号, pp. 111-138. 敬愛大学経済学会.

松中完二. （2004a）「意味認識の原理についての認知的考察－「場面」と「文脈」の観点から－」『敬愛大学 研究論集』第66号, pp. 51-98. 敬愛大学経済学会.

松中完二. （2004b）「語の多義的意味拡張についての認知的考察－「山」の場合を基に－」論集編集委員会編. （2004）『日本語教育学の視点』pp. 380-394. 東京堂出版.

松中完二. （2005）「言語表現と意味認識について－認知論的視点から－」『敬愛大学 研究論集』第67号, pp. 129-158. 敬愛大学経済学会.

松中完二. （2006）『現代英語語彙の多義構造－認知的視点から－【実証編】』白桃書房.

松中完二. （2018）『ソシュール言語学の意味論的再検討』ひつじ書房.

松中完二. （2022）「多義の原理についての認知意味論的考察－意味拡張の有契性について－」山梨正明編. （2022）『認知言語学論考 No. 16』（印刷中）. ひつじ書房.

参照辞書

亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著. （1996）『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』三省堂.

新村 出編. （2018）『広辞苑 第七版』岩波書店.

辻 幸夫編. （2013）『新編認知言語学キーワード事典』研究社.